

筑波大学第三学群国際総合学類

卒業論文

エジプト都市部におけるイスラームの「世俗化」
—女性の装いの変化から—

2011 年 1 月

氏 名：鈴木佐江子

学籍番号：200611126

指導教員：関根久雄

目 次

第1章 序論	1
1. 研究の目的	1
2. 研究方法	3
第2章 イスラームとは	4
1. 日常生活に浸透するイスラーム	4
(1)信徒の行動の根拠となるもの	4
(2)六信五行	7
(3)習慣	9
2. イスラームにおける女性	11
(1)女性の役割	11
(2)女性の服装	13
3. イスラームと世俗	17
(1)世俗化の意味	17
(2)トルコの事例ーラーイクリキ	19
第3章 エジプト都市部の人々とイスラーム	21
1. エジプト社会の変遷史	21
(1)エジプトと周辺国の政治的背景	21
(2)女性の服装の変遷	24
(3)現在のエジプト都市部の様子	28
2. イスラームに対する認識と女性の装い	31
(1)ヒジャーブの着用	31
(2)ニカーブの着用	33
(3)洋服からイスラーム服へ	35
3 小括	37
第4章 結論	39
注	42
参考文献	43

英文サマリー	46
謝辞	47

図目次

図 1 19 世紀前半のヴェール姿	25
図 2 1960 年代のカイロ大学卒業式における女性の服装	26
図 3 長袖・マキシ丈のワンピースを着た女性	27
図 4 カラフルな色調の洋服を着用する女性	27
図 5 ヒジャーブの巻き方の例	28

第1章 序論

1. 研究の目的

イスラームは世界三大宗教のうちのひとつであり、十数億人の信徒が世界中に分布している。イスラームの教えは、信仰に関わる側面のみならず、信徒の生活のあらゆる側面を規定する。とは言え、広い地域で信仰されているため、一口にムスリム（イスラーム教徒）と言っても、その生活様式は大きく異なるのが実情である。

筆者は、2008年10月から2009年7月までの約10ヵ月間、エジプトの首都カイロにあるアインシャムス大学に留学した。留学期間中、エジプト都市部の人々の生活を間近に見て、イスラームの伝統と、西洋から流入した文化が入り混じったエジプトの文化に興味を持った。筆者はまた、大学在学中にオマーンやチュニジアなどのムスリム人口の多いアラブ諸国にも訪れる機会を得た。アラビア半島に位置するオマーンは、イスラームの教えに厳格な印象を受けた。例えば、女性も男性も肌の露出を抑えたゆったりとした伝統的な衣装に身を包んでいた。また、デパートの礼拝用の部屋の入り口にはその日の礼拝の時間を知らせる電光掲示板があり、おおむねその時間になると、多くのムスリムが部屋に入っていくのを見かけた。北アフリカに位置するチュニジアは、植民地時代にフランスの文化が持ち込まれ、現在もその文化が浸透している。首都のチュニスで見かけた人々の多くは洋服を着ており、オマーンやエジプトと比較して、礼拝を行っている人をあまり見かけなかった。エジプトの状況はそのどちらの国の文化とも異なり、いわばこれら2カ国の中間に位置していると感じた。イスラームには、礼拝の作法や商売の決まりに至るまで、信徒の日常生活のあらゆる側面を規定する厳しい戒律、シャリーア（イスラーム法）がある。シャリーアに加え、イスラームの聖典であるクルアーンや、預言者ムハンマドの言行録であるハディースの内容も、信徒の行動規範となる。基本的にムスリムは、これらの記述に則って社会生活を送るべきとされる。

しかし、現在のエジプト社会に目を向けてみると、シャリーアやクルアーン、ハディースの教えと、エジプト人ムスリムの実際の習慣や行動が必ずしも一致しているわけではない。例えば、そのことはエジプト都市部におけるムスリマ（女性イスラーム教徒）の装いにおいても顕著である。クルアーンの第24章第31節には、「それから女

の信仰者にも言っておやり、慎みぶかく目を下げて、陰部は大事に守っておき、外部に出ている部分はしかたがないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には蔽いをかぶせるよう」[井筒 1992:451]とあり、女性は肌や髪の出を控えるべきであるという内容である。しかし実際には、肌を覆ってはいるものの体のラインが強調されるタイトな洋服を着ているムスリマや、ヒジャーブ（髪を覆うスカーフ）を着用していないムスリマがいる。これらの様子を目の当たりにすると、エジプトのムスリマが西洋文化の影響を受け、イスラームの教えを守っていないように見えるのである。しかし本人たちは、それをいわゆる脱宗教ではないと捉えている場合がある。例えば、あるエジプト人の女性は、普段からジーンズにジャケットという洋装で、ヒジャーブを着用していないが、それでも自分のことを「よい」ムスリマだと語っている。世俗主義を国是として掲げるトルコ共和国では、世俗化を推進する一環として、体のほとんどを覆う伝統的な黒い衣服の着用を禁止し、洋装に切り替えた。カイロの一部のムスリマのような、洋服を着て、かつヒジャーブを着用していない姿を見ると、トルコの世俗化現象と重なるところがある。しかし、カイロのムスリマの場合はそれを世俗化であるとは捉えていない。

国外からの影響を受けて服装や暮らしが変わっていく一方で、イスラームの教えを厳格に守ることでよりよい世界を目指すというイスラーム回帰運動、つまり「イスラーム原理主義」運動が台頭しているのも事実である。1920年代に起こった女性解放運動⁽¹⁾の後、エジプト人ムスリマのヒジャーブ着用率は下がった。しかし、1970年代における「イスラーム原理主義」運動の高まりとともに、再びヒジャーブを着用するムスリマが増加した。さらに、「ジハード団」や「タクフィール・ワ・ヒジュラ（断罪と聖遷）」などの「イスラーム原理主義」組織も「女性は長袖の衣服を着用すべきだ」と主張したと、カイロ大学教授のサイイド・アシュマーウィーは述べた。近年、目以外の部分をすべて覆うヴェール（ニカーブ）を着用する女性が増えてきていることや、それに伴ってカイロ市内の国立大学において、大学構内に入る時や試験の時に限ってニカーブの着用を禁止したことからも、女性の装いの変化からエジプト社会のイスラームに対する認識を探ることができる。と考える。

このように、現在のエジプト都市部においては、イスラームへの回帰（原理主義）と「世俗化」という相反する出来事が同時に起こっている。そのような状況におけるエジプト特有の「世俗化」とは何なのであろうか。本稿では、近代におけるエジプト

社会の変化とムスリマの装いの変化を考察することで、エジプト都市部におけるイスラームの「世俗化」の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本稿では、文献とフィールドワークから得られた情報を基に研究を進める。文献研究は、イスラームやエジプト社会に関する文献を中心に行う。フィールドワークに関して、筆者は2008年10月から2009年7月までの約10ヶ月間と、2010年7月の約3週間、エジプトに滞在した。前者は国立アインシャムス大学に留学のため、後者は都市部（カイロ・ギザ）に住むエジプト人ムスリムを対象にインタビューを行うためである。本稿では、上記の期間にエジプト都市部にて筆者が見聞きした情報も用いて論じる。

第2章では、イスラームとはどのような宗教であるかを述べる。まず、イスラームが、信徒の日常生活、特に、思想や宗教的儀礼以外の側面にどのような影響を与えているかを述べる。さらに、イスラームの教えにおける女性の立場やいわゆる世俗（あるいは世俗化）の意味がどのように扱われてきたのか、先行研究を通じて論じる。第3章では、エジプト都市部における人々のイスラームに対する意識を明らかにする。まず、エジプトがイギリスの保護領となる19世紀から現在までの歴史を概観し、エジプトでの出来事と、それに伴ってイスラームに対する意識がどう変化したのかを探る。次に、現在のエジプト都市部における人々のイスラームに対する意識を、女性の装いから考察する。第4章では、以上の考察と分析を踏まえ、エジプト都市部におけるイスラームの「世俗化」とは何なのか明らかにし、これを結論とする。

第2章 イスラームとは

1. 日常生活に浸透するイスラーム

(1) 信徒の行動の根拠となるもの

イスラームは社会性の強い宗教であると言われている。これは、イスラームは個人の信仰という側面のみならず、信徒の生活のあらゆる側面を規定するという意味である。宗教的な側面、つまり宗教的世界観や礼拝などの行いの作法、善悪の価値基準などに加え、いわゆる商法や刑法に至るまで、あらゆる物事に関する規定がある。主にその基準となるものは、クルアーン（聖典）、シャリーア（イスラーム法）、ハディース（預言者ムハンマドの言行録）である。ムスリムが何かを行うときの作法や、ものごとに対する善悪の基準はこれらの内容によって判断されることが多い。

1)クルアーン

クルアーンは、唯一神アッラーフが預言者ムハンマドを通して人類に下した啓示をアラビア語でそのまま書き留めたものである。「イスラーム」とは、「唯一神アッラーフに絶対的に服従すること」を意味する。神に服従・帰依することは、具体的にはクルアーンの言葉に従うことである。従ってクルアーンは人間の善悪に関する判断の究極的基準として、ムスリムの思考や行動を規制するものである。クルアーンには、ムスリムが行うべき五行（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）の方法など信仰行為に関するもの、神は唯一であることなど内面の信仰に関するもの、結婚や家族、金融など社会生活に関するもの、統治の原則など国家の原則に関するものなどの内容が含まれている[小杉 1994:60]。クルアーンとは、本来「声に出して詠まれるもの」という意味であり、これを日々声に出して朗誦することが信仰上の根幹ともなる[塩尻 2005:54]。クルアーンはアラビア語の韻を重視した散文学の傑作であるといわれ、アラビア語で朗誦することによって音楽性や芸術性が表現される。イスラーム世界では非アラビア語圏でもクルアーンの朗誦が盛んであるが、それは、意味がわからない場合ですら、言葉の音の美しさが心に響くからだと言われている。同じようなリズムの文節が繰り返されていること、また、文節の最後は韻を踏んでいることから、音としてのクルアーンの美しさが生まれている。また、同じ文章を繰り返すことで、聞く者を陶醉の境

地へと誘う[塩尻 2005:55]。

現在、アラビア語を母語としない地域、例えばアフリカ内陸部から東南アジアや中国に至るまで、広範な地域にイスラームが広まっているため、アラビア語以外の言語に翻訳されたクルアーンも多数存在する。しかし、クルアーンは神の言葉をそのままアラビア語で書いてあることが重要なのであって、翻訳されたクルアーンは正式なものとは認められず、儀礼に使用されることはない。これらは信徒の理解を助けるためのものであり、あくまで「注釈」という扱いである。礼拝で外国語に翻訳したクルアーンを用いることが禁止されているのは、アッラーフがアラビア語を聖なる言語として選んだという理由のほか、翻訳すれば先に述べた独特の芸術性、つまり音楽的な韻文学としての魅力が失われるからでもある[塩尻 2007:30]。

現在エジプトでは、クルアーンを正しく解釈するための教室が開かれている。また、クルアーンの章句が書かれた壁掛けやステッカーも生産されており、商店の内装や車・バイクなどに貼られているのをよく見かける。

2) シャリーア

シャリーアはクルアーンをハディースなどで拡大解釈して成立したものである。シャリーアは、クルアーン、スンナ（ハディースから得られる知識）、イジュマー（信徒の見解の一致、現実には法学者の見解の一致）、キヤース（法学者による類推）の4点を法源として制定される厳格な道德規範である。成文法ではなく、法学者が原理にのっとり個々の事例を判定する不文法である[塩尻 2005:56]。唯一の立法者はアッラーフであり、神の意志や命令はクルアーンに示されている。何か新しい事態に対処する必要が生じた時はクルアーンをもとに、必要な解釈を行うことで新しい事態に対応する[横田 2009:16]。法解釈の方法論として、クルアーンを補うものとしてスンナ、イジュマー、キヤースが法源として確立されたものの、これらのいずれを重視し、どの範囲まで用いるかによって具体的解釈に違いが生じ、多くの学派が生まれた。9世紀の中頃までに成立したハナフィー派、マーリク派、シャーフイー派、ハンバル派の4学派が、スンナ派の公認学派として今日まで残っている。法の執行においては、この4学派の学説を遵守する体制を現在まで採っているが、実際には個々の法学者の判断によって運用されるため、時代や地域に即した柔軟な対応が見られる[塩尻 2005:56]。

シャリーアの内容は、「儀礼的規範」と「法的規範」の2つに分けられる。「儀礼的規範」は、礼拝・喜捨・断食・巡礼・葬礼・浄めなど、個々のムスリムの宗教的生活に関わるものである。それに対し「法的規範」は、婚姻・離婚・親子関係・相続・契約や売買、非ムスリムの権利と義務、犯罪と刑罰、戦争などの公私両方にわたる内容である。

シャリーアが体系化された後の新しい事態に対応するため世俗法（カーヌーン）が定められ、またアード（イスラーム社会の慣行および慣習法）もシャリーアを補完するものとして広く用いられた。19世紀以降、民法、刑法などヨーロッパの法体系が強い影響力をもち、ヨーロッパにならった基本法としての憲法が制定されたりするようになると、シャリーアの絶対性・完結性の理念が傷つけられる結果となった。というのは、近代ヨーロッパの国民国家をモデルとして制定された憲法は、国家の統治の仕組みと主権者である国民の権利や義務が明確に規定されている。一方、シャリーアはもともと国民国家ではなく、ウンマにおいて運用されることを想定したものである。ウンマとは、イスラームにおいてムスリムが帰属すべき集団であり、一般的にはイスラーム共同体と呼ばれている。ウンマにおいてはアッラーフを立法者かつ主権者としていたため、国民に主権を認める国民国家の概念はなかった。つまり、シャリーアはウンマを治める際には絶対的な法であったが、国民国家を想定したものではないため現代の社会にはそぐわないという状況が起こっているのである。とはいえ、近代的な憲法を敷いている国や地域でも、社会的・日常的にはシャリーアが大きな力を持っている。特に結婚、離婚、遺産相続などの家族に関する分野の法は、シャリーアに従っている部分が多い。

また、現代において、国家の法としてシャリーアの実施を要求することが政治的争点とされる局面もみられるようになっている。例えば、1970年代以降のエジプトで生まれた過激派の原理主義組織「イスラーム集団」の目的は、シャリーアを全面適用する「真正なイスラーム社会」の再現であり、ムバーラク政権を打倒しなければならないという思想を持っていた[藤原 2001:66]。

3)ハディース

ムハンマドが日常生活の中で語った言葉や行動が、ハディースとしてムハンマドの死後も語り継がれている。ムハンマドの生前の言行録に加え、彼に従ってきた第一世

代の人たちの記録も含まれている[塩尻 2007:117]。ハディースは 8 世紀に初めて収集・記録され、その後、さまざまな編纂方法でまとめられたハディース集が生まれた。

ハディースは、クルアーンやシャリーアに加え、信徒の行動の規範となる。ムハンマドの言行によって示されているのは、ムハンマドの範例や慣行、つまり正しい伝統やムスリムの守るべき正しい基準であり、これをスンナという。スンナは、2)で述べたイスラーム法の古典理論における 4 つの法源、すなわちクルアーン、スンナ、イジュマー、キヤースの一つとして、クルアーンに次ぐ権威をもつ。

クルアーンは、ムハンマドが神からもたらされた言葉をそのまま記してあるため、信徒にとって絶対的な権威がある。しかしクルアーンでの指示はおおむね原理・原則、ガイドラインに過ぎないため、実践するにはより具体的な細目が必要である。従って、それをムハンマドが追加指示するのである[小杉 1994:122]。例えば、「喜捨をせよ」というのがクルアーンの命令であれば、それについて具体的な比率や額を述べるのがムハンマドの指示であり、ハディースで述べられていることなのである。また塩尻[塩尻 2007:118]は、ハディースが「第二の聖典」と呼ばれる理由を以下のように述べる。

もともとクルアーンには基本的な原理原則が書かれていて、細かな指示はみられない。そのために預言者が亡くなってしまうと、誰も権威をもって指示をする人がいなくなってしまう、また同時にイスラーム世界が急速に拡大をしていくと、人々はこれまで考えられなかったような事態に出会うことになる。そのような状況にあってハディースをひもとき、この場合には預言者はこう行ったので、では私たちはこうすればいいのだ、という判断を得ることができる。そのためにハディースは「第二の聖典」として、信仰生活の指針とされるのである[塩尻 2007:118]。

ハディースを読み解くことで、イスラームの教えに関する具体的な指示や過去の範例がわかる。ムハンマド亡きあと、イスラームを取り巻く情勢は変化し、人々は新しい事態に遭遇しただろうが、ハディースをひもとくことが、正しい行いを選択する一助となったのだろう。

(2) 六信五行

イスラームの基本的な教義は「六信五行」にまとめられる。イスラームは、信仰だけあれば足りるとする宗教ではなく、正しい信仰が行為によって具体的に表現されなければならないとする。その信仰の内容と行為のうち、とくに神への奉仕に関わるものを簡潔にまとめたものが「六信五行」である。「六信」とはムスリムがその存在を信じなければならないもので、神、天使、聖典、預言者、来世、予定である。クルアーンにはこの6項目をまとめて示した章句はないが、いずれも繰り返し登場する話題である[小杉 1994:81]。「五行」とはムスリムが行わなければならない基本的な宗教儀礼のことで、信仰告白（シャハーダ）、礼拝（サラート）、喜捨（ザカート）、断食（サウム）、巡礼（ハッジュ）である[塩尻 2005:51-52]。ここでは、ムスリムに特有の生活習慣に関わる「五行」について詳述する。

信仰告白（シャハーダ）とは、「アッラーフのほかには神はない。ムハンマドはアッラーフの使徒である」という言葉をアラビア語で唱えることである。成人男性2人以上の証人の前でこの言葉を唱えることで、ムスリムに改宗することができる。礼拝時にも毎回これを唱える。

ムスリムは、1日5回、日没、夜半、夜明け、昼、午後に聖地マッカの方角を向いて礼拝を行う。これは神への服従と感謝の念を表明するものである。礼拝をする前には体を清め、礼拝の動作は決められた手順によって行う。普段の礼拝は任意の場所において個人で行ってもよい。毎週金曜日の正午にはモスクにてイマーム（集団礼拝の指導者）の指導のもとに集団礼拝を行う。

喜捨（ザカート）とは、義務としての喜捨であり、税率が定められている。困窮者の援助や信者の相互扶助のために使われる。喜捨は政府によって徴収される。

断食（サウム）とは、イスラーム暦第9月（ラマダーン月）の1ヶ月間、日の出から日没まで一切の飲食、喫煙、性交などを断って生活することである。子供、病人、身体虚弱者、妊婦、旅人、戦闘中の兵士などは断食を除外されるが、最初に挙げた3者以外は後日埋め合わせをしなければならない。断食によって、神の日ごろの恩恵への感謝、貧者への思いやり、ともに苦しみに耐える信者の連帯意識を養う。

巡礼（ハッジュ）とは、預言者ムハンマドの生誕地でありイスラームの聖地であるマッカにあるカアバ神殿に参詣することである。先に挙げた4つの行はすべての信徒に義務づけられているが、巡礼は総体としてのムスリムに課せられた義務である。つまり「そこに旅をする余裕がある者」に課せられる義務で、身体的、金銭的にマッカ

まで旅行することが可能な者が一生に一度行えばよい。巡礼は、第12月（巡礼月）の8日から、定められた順序・方法で必ず集団で行わなければならない。それ以外の時にマッカへ参詣する場合は小巡礼（ウムラ）と呼び、義務のハッジとは区別される。

(3)習慣

ここでは、宗教的側面以外で、イスラームの教えが深く関わっている習慣に関して述べる。まずは食べ物に関する規定である。クルアーンの第2章第173節に、ムスリムが禁じられている食べ物（「ハラーム」）についての記述がある。

アッラーフが汝らに禁じ給うた食物といえば、死肉、血、豚の肉、それから（屠る時に）アッラーフ以外の名が唱えられたもの（異神に捧げられたもの）のみ。それとても、自ら食い気を起こしたり、わざと（神命に）そむこうとの心からではなくて、やむなく（食べた）場合には、別に罪にはなりはせぬ[井筒 1992:47]。

ムスリムが豚肉を食べることを避けるというのはよく知られていることである。現在は、豚肉を食べることが禁止された背景には、豚肉の保管・調理の際の衛生的理由や、ブタの生態がイスラーム創成期のムスリムの遊牧生活にそぐわなかったという合理的な理由があると主張する研究者もいる。衛生問題が一応解決した現在でも、豚肉が特に忌まれる食べ物であるのは、ブタは不浄であると認識されることに由来している。赤堀は、これまで多くのムスリム学者が禁止の理由を議論してきたが、それらは神の意図を推しはかろうとする人間の試みに過ぎず、禁止の理由を問われれば「神が禁じたから」というのが最も正当な答えであると述べる [赤堀 2003:199]。また、豚肉以外の肉であっても、定められた方法に基づいて屠殺されたもの以外は口にしていけないとされている。

アラビア語に、「加工や調理の作法を順守し、ムスリムが食べることができるものである」という意味をもつ「ハラール」という言葉がある。ハラールは、もともと、イスラームの規範・基準において「許される、合法的」ものという意味である。食べることを禁じられた材料が入っていない食品であるということだけでなく、正しい方法で加工や調理が行われた食品であるということを示すために、市販されているハラールフードに「ハラール」と書いたマークがついていることがある。日本においても、

ムスリムが多く住む東京都や神戸市にはハラールフードを扱う店舗がある。アラブ圏の国の航空会社の機内食のメニューにも、ハラール認定された食事であることを意味する注意書きが見られる。

また、第2章第172節の記述からわかるように、他に食べるものがなく、やむを得ない場合や、それと知らず口にしてしまった場合は食べても罪にはならない。

次に、飲酒に関して、クルアーンには以下の記述がある。

これ、汝ら、信徒の者よ、酒と賭矢（かけや）と偶像神と占矢（うらないや・吉凶二種の矢で、旅行その他重要な仕事に手をつける前にその可否を占う）とはいずれも厭（いと）うべきこと、シャイターン（サタン）の業。心して避けよ。さすれば汝ら運がよくなる。 (第5章第90節) [井筒 1992:156]

シャイターンの狙いは酒や賭矢などで汝らの間に敵意と憎悪を煽り立て、アッラーを忘れさせ、礼拝を怠るようにしむけるところにある。汝らきっぱりとやめられぬか。 (第5章第91節) [井筒 1992:156]

イスラーム発生期、マッカの人々はことあるごとに酒を飲んでいて、飲酒の結果、賭矢と呼ばれる遊びに夢中になり、さまざまな弊害が目につくようになった。また、ある男が酔いの覚めないまま礼拝を行い、クルアーンの章句を誤って朗読したという話も残っている[四戸 2003:237]。このため、ムハンマドはついに全面禁酒の啓示を受けるに至った。酒と賭矢、偶像と占矢は信仰を妨げるものであるから、これを避けるようにという命令であった。ハディースにおいても、酒は悪徳を誘うものであるから飲んではいけないとしたものが多い。酒も豚肉同様、不浄であると認識されていると赤堀は述べている[赤堀 2003:199]。確かに、筆者がエジプト人のムスリマの友人になぜ酒を飲まないか尋ねると、酒に関して「汚い、不浄だ」という意味の単語を使い、生理的に受け付けない、という様子であった。

次に喫煙に関して、クルアーンにおいて、喫煙に関する直接的な記述は見当たらない。というのも、タバコは後代になってイスラーム世界に導入されたためである。近年、タバコのように、長らくハラールであるかハラームであるかの議論がなされ、なお完全には決着のつかないものがますます増えている[赤堀 2003:199]。

タバコに関しては、「アッラーの道に（宗教のために）惜しみなく財を使え。だがわれとわが身を破滅に投げ込んでではならぬ。」（第2章第195節）[井筒 1992:52]という記述をもとに、イスラームの学者が様々な異なる見解を示している。一般的には、タバコは「不法ではないが、財の浪費という面で好ましくないもの」と考えられている。またムスリムの健康と生命と財産は、神から一時的に預かったものであり、それらを危険に陥れたり、勝手に処置してはならないという考え方がある。これによると医者から禁煙宣告を受けた者にとって、タバコは宗教的意味において不法となる。ただし、断食中の喫煙は禁止されている。

次にムスリムの服装に関して、桜井は以下のように述べている。

どのような服装を身につけるかは、性別、年齢、生活地域、さらには階層によって異なっているが、共通している点は、男女ともに肌を隠すことと体の線を出さないことである。女性は、外出するときには頭から足の先まで隠しているが、男性といえども、暑いからといって半ズボンで外出するなど、もっての外である。シャツの袖も長袖が基本である [桜井 2003:200-201]。

しかし、筆者が滞在していたエジプトではこれは必ずしもあてはまることではなかった。

この節では、ムスリムの行動の規範はクルアーンやシャリーア、ハディースによって示されており、これらが日々の行いや習慣に大きな影響を与えているということを述べた。このことから、イスラームは単に個人の信仰という面にとどまらず、行いとして自らの信仰を示すことが求められる宗教であり、ムスリム個人のみならずムスリムが暮らす社会にも影響を与えるものであるということがわかった。これらの規範の中には、女性に独特の決まりごとがある。従って次節では、女性に関わる習慣について述べる。

2. イスラームにおける女性

(1) 女性の役割

エジプトでもっとも著名なイスラーム主義運動組織、ムスリム同胞団の女性幹部で、「同胞団の母」とも呼ばれるザイナブ・ガザーリーは、女性の役割について以下のよ

うに発言している。

イスラームは、女性が積極的に公的世界に参加することを禁じてはいません。働くこと、政治に関わること、自分の意見を述べること、その他を妨げてはいません。ただし、それは彼女の第一の義務、すなわち母としてイスラームの教えに従って子供たちの最初のしつけをするという義務を阻害しない限りにおいてです。そこで、彼女の第一番めの、神聖なそしてもっとも重要な使命は、母そして妻となることなのです[大塚 2000:125]。

このようにザイナブは、女性は家庭内の活動を優先するべきであると明確に主張している。しかし、逆説的なことに、このような彼女の思想は、家庭内ではなく、家庭外の公の場での活動を通して得られたものである [大塚 2000:126]。この記述からは、彼女が家庭の外で働いた経験から、女性は働くことを禁じられてはいないが、家庭内での女性の仕事が優先されるべきであるという考えに至ったことがわかる。

また片倉によると、ムスリム社会、特にアラビア半島諸国の社会においては「男の世界」と「女の世界」を分けることが原則となっている。従って、女性は女医にみてもらうほうがよいと考えるから女性の医者も多いし、女性の学校には女性の教員が必要である。アラブ首長国連邦やサウディアラビアなどの都市には、行員も客もすべて女性である女性専用の銀行も次々に設立されている[片倉 1991:85,93]。この記述からは、家庭外で仕事を行う女性が求められているということが伺える。

このように、イスラームの教えにおいては、女性が家庭外で働くことは禁じられてはいない。しかし実際には、女性は家庭を守り、家事や育児を行うことが主な役割であるという認識が強いのも事実である。

カイロ・アメリカン大学の経済学教授 Galal Amin は、1950 年代から 2000 年までの約 50 年間で女性の立場は大きく変化したと述べている[Amin 2000:77]。Amin は著書において、約 50 年前の Amin の母の生活と、現在一児の母となった Amin の娘の生活を比べている。彼の娘は朝から晩まで仕事に就いている。出勤前と帰宅後の家にいる時間は、子供の世話や家事をしている。さらに、週に 2 回修士号を取得するための夜の講習に車で出かけ、論文も執筆している。外出する機会が多いためか、Amin の母の若い頃よりも、見た目に気を遣う。それに対し、約 50 年前、母は家の外で仕事に就

いておらず、大学にも通わず、車の運転もせず、それどころかほとんど外出することはなかった。では母は何をしていたのかというと、いつもキッチンにいて、料理か、そうでなくてもそれに関わることをしていたという。息子たちが学校から帰ってくると、その都度彼らそれぞれのために料理を作っていた。母はその生き方に疑問はないようであった。父はリベラルな教育を受けていたが、父も母の生活に対してそれが普通だと考えていた。母の生活はその世代の女性を象徴している。約 50 年前の女性たちは、Amin の母と同様、現金を稼ぐ手段がないので夫に依存しないでは生きていけなかった。従って、夫に養い続けてもらえるように家事のスキルを身につける必要があった。それに対し、Amin の娘は家庭の外で稼いだり教育を受けたりしている。50 年前と比べ、女性の役割は変わった。生活にかかる費用が上がったので、男性は女性が稼ぐ力を認めるようになり、相互に尊重できる関係となった結果、家庭内における権力が完全に夫・父のものではなくなった。また、子供の数や、家で料理をする頻度は少なくなった。妻の夫に対する経済的な依存度と、夫婦の関係性という点において、Amin の姉妹は母と娘の間であると述べる。ここまで、Amin の娘の世代の方が生活の質が向上したように思えるが、母の世代の方が良かったこともある。家族が安定していて家庭崩壊の心配が少ないことや、子供に精神的な不安を与えることがないので子供の成長に良い影響を与えることだ。従って、現在女性にも雇用の機会が広がったこと、以前より経済的に自由が増えたことは認めるが、家族関係の希薄化など、他の領域で失われたものがあることを忘れてはならない、と Amin は述べている [Amin 2000:77-84]。

女性は働くことを禁じられておらず、働きたいと思う人には働く権利はあるが、最も大事な役割は、よき妻・母となることである、というのがイスラームの教えである。家庭外で仕事をしていてもよいが、もし女性が家庭のことを顧みなくなれば家庭がうまくいかなくなる。従って、女性に家庭を守る役割を割り振ることで、社会を構成する最小単位としての家族を守ろうとしていることがわかる。

(2)女性の服装

1)様々な服装

女性の服装やヴェールは、時代や地域によって、様々な種類がある。髪や肌を覆うヴェールは、アラビア語で「隠すもの」という意味の「ヒジャーブ」と呼ばれる。狭

義には、顔を出し、髪と首を覆うヴェールのことである。「ヒマール」は、丈の長いヴェールである。顔は出すが、髪と首を隠し、布は胸のあたりまでの長さがある。「ニカーブ」は、顔全体を覆い、目のみ出すヴェールである。「ブルカ」は顔の中央から目だけを出して足もとまで垂らす長い布である。「アバヤ」は黒い布で顔と手足の先以外をすべて隠している。「チャドル」はイランに多く、顔だけ出して体全体を覆う黒い布である。

2)女性が露出を避ける根拠—クルアーンより

ムスリマ（イスラーム教徒の女性）は、地域や個人の考え方により程度の差はあるが、髪や肌を露出しないような服装をするのが望ましいとされている。女性が肌を隠すべきという根拠となっているのは、クルアーンの以下の部分である。

それから女の信仰者にも言っておやり、慎みぶかく目を下げて、陰部は大事に守っておき、外部に出ている部分はしかたがないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には蔽いをかぶせるよう。（第24章第31節）[井筒 1992:451]

つまり、自然に外に出るものの他には意図的に女性の美しさや飾りを目立たせてはならない、という規範である。ただ、体の露出を抑えることを勧めてはいるが、覆うべき箇所についての具体的な指示がクルアーンには書かれていない。この記述に関して、内藤と阪口は、それぞれ以下のように述べている。

端的に言えば、女性は陰部あるいは、身体の美となるところを隠せということになる。ヴェール（顔覆い）を胸元まで垂らしているように求めていることから、顔と胸は覆うことを求められていると解釈できるが、顔や頭部をどこまで、どのように隠すのかについての具体的指示はない [内藤 2007:12]。

コーランは女性の髪を隠せと明示的に記しているわけではない。コーランは、ムスリムの女性は「隠すべきところ」を隠せと命じているにすぎない。しかしながら、多くのムスリムはこの「隠すべきところ」とは女性の頭髪を含むと考えている [阪口 2007:37]。

従って、どの程度を隠すのかは各人の解釈によって異なってくる。クルアーンにおいて、隠す部分が明記されていないことが、女性の服装に関して論争が引き起こされる一因である。

また、塩尻[塩尻 2007:123]はクルアーンの第 24 章第 31 節に関して以下のように述べる。

このような表現はほかの宗教にもたくさんあるが、現代、宗教の規範を文字通り実行するという人は少数派であろう。したがって、これらの記述はむしろ精神的な規範として把握されるべきであり、言い換えればベールは女性の貞操に対する決意と心の守りを表すものではないかと思われる。しかし、文字通りそれを身につけなければ正しいイスラーム教徒ではないといったような時代の風潮が見られるようになると、女性に対してさらに厳格にベールやイスラーム風の衣服の着方を強制してくるようになる。現在のイスラーム世界は、恐らくイスラームが発祥してから 1400 年の歴史の中で、最も厳格な規範順守が要求される時代になっているように思われる[塩尻 2007:123]。

塩尻は、現代におけるヴェールの着用に関して重要なのは、文字通りそれを身につけることより、精神的な規範として把握することであると述べている。では、実際にヴェールを着用することにどのような意味があるのかということについて次項で述べる。

3) ヴェール着用の意味

阪口は、多くのムスリムにとって、ヴェールを着用するかどうかは単なるファッションの問題ではなく、信仰ないしは宗教的アイデンティティにかかわる問題であると述べる[阪口 2007:37]。スカーフを女性抑圧のシンボルと考え、ヴェールを脱ぎ捨てるムスリマがいることも事実であるが、自らの意志でヴェールを着用するムスリマも多い。こうした女性からすれば、スカーフは抑圧のシンボルではない。それどころか、ヴェールの着用は、ムスリマとしての自らの宗教的アイデンティティを表明したり、男性からの性的な視線を逃れるための行為である。着用者にしてみれば、ヴェールで肌や髪を隠すことはクルアーンの記述を根拠に行っていることであり、神の言葉に従

っていることを示す行為である。また、それを目にする人々にも自分がムスリマであることを主張することができ、自分のアイデンティティを表明できる。

男性は、ヴェールを着用している女性に対しては、相応の敬意をもって接する。また、女性はヴェールを着用することで、容姿で判断されることなく、中身で勝負しようということになる。イスラーム圏では、ヴェールを着用することは、人と人、特に男性と女性の適切な間合いを作ることにつながるのである[片倉 1991:94-95]。また山岸は、ヴェールを「しるし」とであると述べている[山岸 1998:202]。つまり、ヴェールは「その着用者が社会的規範を尊重している。したがって信用に値する、と見せるのに有効な外見をつくる」[山岸 1998:203]役割を担っている。山岸も、ヴェールの着用が女性の社会参加を助成する面があると指摘している。ヴェールを身につけることによって、「公的な場、親族以外の男性の前でも女性である自分の尊厳を示し、男性との『適正距離』を保って活動できることを可能にしている」[山岸 1998:203]のである。

ムスリマによるヴェールの着用は、抑圧の産物ではなく、逆に、積極的で自律的な立場表明であり、自らを解放しようとする行為ですらありうる。ヴェールを着用することの意味は自明ではない。ヴェールは、一方から見れば、差別、抑圧のシンボルであるが、他方から見れば、自律性、解放のシンボルでもある[阪口 2007:41]。このように、ヴェールを抑圧の象徴として捉えるのではなく、むしろ女性の自律性の象徴、女性の活動範囲の拡大に貢献していると捉える研究が増えている。しかしそのような現象が起こっているかどうかは、依然として地域差があると考えられる。例えば、イスラームの教えに厳格なサウディアラビアでは、ほとんどの女性はヴェールを着用している。しかし、女性は自動車の運転免許を取得できないなど、女性の活動範囲が必ずしも広がっているとはいえない。

ムスリマの服装に関しては、クルアーンの記述を根拠に、肌や髪の出をを抑えるべきであるという認識が浸透している。ヴェールで髪を覆うことで、宗教的アイデンティティを表明したり、男女の適切な間合いを作ったり、女性の社会参加が促進されるという利点がある。従って、ヴェールを着用して家庭外で活躍する女性が増えているが、その一方で、家庭においてよい妻・母となることが重要な役割であるとの認識も根強い。一口にムスリマといっても様々な生き方があり、それぞれの女性が、イスラームの女性観や服装などの規範とのバランスをうまくとって自分の生き方を選択しているのではないかと考える。

3. イスラームと世俗

(1) 世俗化の意味

世俗化論は、およそ 1960 年代以降に欧米の宗教社会学の領域において流行した宗教と社会変動をめぐる一般理論である[山中 2005:193]。大塚は、世俗化は近代化の指標の 1 つとなると述べる[大塚 2000:229]。世俗化という言葉は、それが用いられる文脈に応じて、さまざまな現象を意味している。そこでまず、先行研究において世俗化と呼ばれてきた現象について述べる。以下の分類は、大塚の議論[大塚 2004a:408-415, 2004b:179-182]を参考にした。

1) 政教分離

世俗化の代表的現象として政教分離がある。政教分離にも国によって異なる形態が見出される。例えばフランスにおける政教分離とは、政府が管理する公共的空間から宗教色を排除しようとするものである。ドイツにおいては、政府と宗教団体の関わりを否定しないものの、特定の宗教・宗派に特権を与えないという政策をとる。

西洋キリスト教社会は政教二元論であるの対し、イスラーム世界は政教一元論であると考えられている。しかし、イスラーム史の現実を検討すると、理念とは異なる「政教二元論」的な構図を見出すことも可能である。この議論に関しては、5)で詳しく述べる。

2) 宗教の私事化

これは、公／私領域という二分法を前提にして、宗教は公共的空間から退き、もっぱら私的領域における活動に重心を移していく過程を指す。この場合の「公共的なもの」は、国家・政府に関わる施設・制度のみならず、社会を構成する人々に「共通したもの」や「開かれたもの」といった意味も含む。宗教現象が公共的な場面からは撤退するが、それは宗教の衰退を意味するのではなく、むしろ家庭や個人の内面といった私的領域において信仰は根強く維持、さらには強化される場合もある。

先に述べたようにこの議論は、西洋キリスト教世界の歴史的経験に基づく公私二元論を理論的背景としており、この図式そのものをイスラーム世界にも応用できるものかどうかという問題がある。

3)宗教から科学へ

思考や価値観の領域において、人々の世界観が宗教用語ではなく、近代科学に代表される「脱宗教的」な用語によって表現されるようになる過程を指す。近代科学的知識の普及により、クルアーンにも科学的解釈を施すウラマー（イスラーム諸学に通じたムスリム学者）が現れた。創造主による被造物に対する絶対的の命令を人間中心的な科学の用語で説明することは、世俗化ということができる。

4)現世中心主義、「他界観」の希薄化

世俗化という用語は、宗教が一般的に持つ「他界観」、いわば現世以外の世界に対する関心の希薄化という意味でも使われる。ここでいう「他界」とは、キリスト教やイスラームの文脈においては「来世」、すなわちこの世界が終末の時を迎え、最後の審判を受けた人々が送られる天国や地獄を指す。「来世」に対する関心の衰弱から生じる現世中心主義、それはこの世における物質的繁栄を至上の価値とみなす世界観が広まる過程であり、資本主義に親和的な傾向であるといえる。

5)聖職者、宗教指導者の権威の衰退

世俗化には、伝統的宗教教育によって養成されてきた聖職者・宗教指導者の衰退という側面もある。これはいわば「俗人」や「平信徒」の位置にあった者たちの政治的権力、社会的・文化的重要度、さらには「宗教的」権威すら高まってくることを意味する。

イスラームにおける聖職者とは、信徒からなる共同体を宗教面で指導し、教化する人物と定める。この意味における聖職者としては、まずウラマーが挙げられる。ウラマーとはイスラーム諸学に通じたムスリム学者を集合的に指す言葉である。ウラマーがクルアーンの章句を正確に朗読し、一般のムスリムに正しい生き方を指導することでイスラーム共同体の秩序の維持に貢献する。しかし、ウラマーはイスラーム共同体の政治的指導者となることは稀であった。共同体の長の役割は、スンナ派の場合ハリーファ（カリフ）が担った。ハリーファの原義は後継者・代理人である。ムハンマドの預言者としての側面ではなく、政治指導者としての側面の後継者という意味であり、従ってハリーファは、宗教的というよりも政治的役職を示すものであった。しかし、

のちにスルターンやマリクという称号をいただく政治権力者たちが現れてくると、ハリーファは相対的に「宗教的」存在とみなされるようになった。オスマン朝には「スルターン＝カリフ制」という制度があったが、オスマン帝国の崩壊により、ハリーファは不在となった。今日のイスラーム諸国では、王（マリク）などの他に、大統領や首相といった西洋起源の称号を持つ人々が政治指導者となっている。これが、1)で述べた「政教二元論」的な構図である。

(2)トルコの事例ーラーイクリキ

イスラーム世界の中で世俗主義を掲げている国として、トルコ共和国が挙げられる。トルコ共和国は、前身のオスマン帝国が崩壊した1923年に建国された。初代大統領のムスタファ・ケマル・アタテュルクは、世俗化こそ国家の生存と近代化の絶対条件であるとして、様々な世俗化政策を断行した。アラビア文字をラテン・アルファベットに変え、服装もムスリマの黒衣と男性のトルコ帽を禁止し洋装にすることを定めた。他にも、ハリーファ（カリフ）制の廃止、世俗的教育への統一、イスラーム神秘主義教団の施設の閉鎖、宗教指導者（イマーム）や説教師（ハーティブ）を国家管理の下に置くなど、国主導で世俗化を進めた[粕谷 2003:142；内藤 2007:15-16]。

トルコにおける世俗化は、フランスの政教分離（ライシテ）をモデルとしたもので「ラーイクリキ」と呼ばれている。ラーイクリキは、宗教としてのイスラームの存在をなくするというものではなく、イスラームの実践を信教のレベルに限定することであり、公の場での非宗教性を保つことであった。従って、モスクは閉鎖されなかった。ラーイクリキという言葉がトルコで公式に規定されたのは1931年であり、「宗教的思想を国家・世俗の問題および政治から分離せしむる」こと、すなわち政教分離がうたわれた[粕谷 2003:142-143]。法制度はイスラーム法から切り離され、世俗法の体系が整えられた。しかし、家族法の領域だけは、未だに完全な分離はなされていない。

アタテュルクは国家の近代化政策において、女性の地位向上にも重点を置いた。教育統一法による男女教育の平等（1924年）、婦人参政権の早期実現（1934年）などにより、高い教育を受ける機会に恵まれた富裕層の女性たちは着実に社会進出を果たした[大曲 2007:242]。

ラーイクリキは、国家が国民の信仰生活に介入しない信教の自由の原則というよりも、国家があらゆる宗教活動を管理下に置こうとする宗教統制の側面が強い。その点

から見ても、ラーイクリキは政治と宗教の相互の不可侵を命じるという意味での政教分離とはいいがたいと粕谷は述べる。しかしこれは、政教一元的な国家・社会論をもち、原理的に政教分離になじみにくいイスラーム社会における政教分離の現れ方と見ることも可能である [粕谷 2003:143]。

トルコにおいては、国家が主導で世俗化を進めたが、国家による宗教統制の側面が強く、宗教分離とはいいがたいと粕谷は述べた。イスラームは日常生活におけるあらゆる分野を規定する宗教であり、信教のレベルに限定するということがそもそも可能なのかということに筆者は疑問を抱いた。

イスラームは、人々の生活に深く根付いている。信徒の行動の規範もイスラームの教えによって示されている。人々の日常生活において幅広い分野に影響を与えているからこそ、イスラームの世俗化は様々な意味を持ち、地域によって異なる様相が見られる。

第3章 エジプト都市部の人々とイスラーム

1. エジプト社会の変遷史

この節においては、エジプト社会の変遷史として、エジプト国内の政治的背景に加え、関係のある周辺国の出来事、エジプトにおける女性の服装の変遷、現在のエジプト都市部の様子に関して述べる。これらを述べることで、現代のエジプトがどのような政治的・文化的背景によって成り立ったのか理解する。その上で、女性の服装の変遷と、当時の社会の動きやイスラームに関する意識とを関連付けて考察し、現代のエジプト都市部におけるイスラームの特徴を明らかにする。

(1) エジプトと周辺国の政治的背景

ここでは、主に 19 世紀以降のエジプトにおける政治的背景について述べる。

15 世紀に始まる大航海時代以降、世界各地でヨーロッパ諸国による植民地化が進んだ。エジプトも例に漏れず、1882 年にイギリスの支配下におかれることとなった。第一次世界大戦後、反イギリス感情が高まり、1919 年、エジプト人政治家サアド・ザグルールを指導者とする独立運動が起こった（エジプト革命）。この革命では、都市の学生や労働者がデモやストライキなどで中心的役割を果たした。その結果、1922 年にイギリスはエジプトの独立を宣言し、保護国支配が終わった。1923 年には立憲君主制を定める憲法が施行された。しかしイギリス軍が引き続き駐留するなど、イギリスの実質的な支配は続いた。

また 1922 年には、イスラーム国家であったオスマン帝国が崩壊した。これによって、イスラームの統治制度であるスルターン・ハリーファ制⁽²⁾を用いる国家がなくなった。これはつまりイスラーム共同体の長であるハリーファが名実ともに不在になったことを意味し、イスラーム世界に衝撃を与えた。以後、イスラーム諸国では、王（マリク）のなどの他に、大統領や首相といった西洋起源の称号をもつ人々が政治指導者となっている[大塚 2004a:412]。

19 世紀以降のエジプトでは農村から都市への人口移動が顕著となった。この原因は、エジプトが綿花輸出国として資本主義市場に組み込まれた結果、国内で商品・貨幣経済が浸透し、それまでの農村における自給自足経済が成り立たなくなったことである。

また、ムハンマド・アリーの定めた土地国有化政策は時代とともに変更され、やがて個人の土地所有が認められることとなった。この結果、地主層への土地集中が進み、多くの農民が土地を失い、仕事を求めてカイロなどの都市部へ移った。当時、カイロなどの大都市では近代化とともに建設業・輸送業・小売業などの新たな雇用が生まれていたため、移住した人の多くはこれらの仕事に就いた。

横田は、20 世紀前半は、エジプトに大衆社会が成立した時代であったと述べる[横田 2009:11]。大衆社会の性質は様々な角度から論じられるが、伝統的な共同体や階級の解体、産業化の進展などと結び付いている。伝統的なイスラーム社会は、職業ギルド（同業者組合）やスーフィー（イスラーム神秘主義）教団、ウラマーやモスクのネットワークなどによって構成されていた。しかし、20 世紀になると、伝統的なイスラーム社会はそれらの経済基盤とともに解体してゆき、産業化や都市化の進展とともに大衆社会が成立した[横田 2009:11]。

そのような状況の中、ハサン・アル・バンナーが 1928 年にムスリム同胞団を設立した。ムスリム同胞団は、のちにエジプトのみならずイスラーム世界に広く影響を与えるイスラーム原理主義組織である。

1948 年、イギリスがパレスチナから撤退し、イスラエルの建国が宣言された。これにアラブ諸国が反発し、アラブ諸国がイスラエルに宣戦布告、第一次中東戦争（アラブ・イスラエル戦争）が勃発した。この戦争は、エジプトを含むアラブ諸国が敗北した。

エジプトでは、1952 年に自由将校団によるクーデター（エジプト革命）が起こり、ムハンマド・アリー朝が崩壊した。この革命によりエジプトは王制から共和制に移行した。この革命を遂行した自由将校団とは、ガマル・アブドゥル・ナーセルやアンワル・サーダートなど、軍隊の青年将校からなる秘密結社である。1953 年に、ムハンマド・ナギーブが初代大統領に就任した。ナギーブは第一次中東戦争で軍人として活躍し国民的名声を得ており、自由将校団の名目的な首班であった。この頃ムスリム同胞団は社会的・政治的に大きな勢力であり、ナギーブと親しい関係であった。そのため、ナギーブからの権力奪取を目指すナーセルはムスリム同胞団を将来的な敵対者として警戒していた。1954 年、ナーセル暗殺未遂事件が起こり、ナーセルはこれを機にムスリム同胞団を非合法化した。ナギーブもムスリム同胞団との関係を追及されて大統領の座を追われた。

そして 1956 年にナーセルが大統領に就任した。同 1956 年、スエズ運河の国有化を

巡って第二次中東戦争（スエズ危機）が勃発したが、イギリス・フランス・イスラエル軍に対して政治的な勝利を収めた。こうした外交的成功により、彼はアラブ民族主義の先導者、「アラブの英雄」とみなされ、アラブ城内政治での支持を強めた。ナーセルが掲げたアラブ民族主義は当時のアラブ世界の支配的な政治潮流となった。しかし結局、民主主義運動はその基本目標であるアラブ民族の統一を達成することができなかった。さらに、1967年に勃発したイスラエルとアラブ諸国の間の第三次中東戦争でアラブ側は大敗を喫し、エジプトはシナイ半島をイスラエルに占領されるなど、大打撃を被った。この結果、外交的成功に大きく依拠していたナーセル大統領の権威は著しく失墜し、一時は辞意を表明する事態となった。また、アラブ諸国の敗北は、アラブ民族主義が衰退する契機となり、イスラーム復興隆盛の一因となった。正しくイスラームを信仰しないアラブ諸国にアッラーフが罰をくだしたとする声が、アラブ世界に流布したという。

1969年、イランにおいてイスラーム革命が起こった。ムスリム法学者アヤトッラー・ホメイニーを指導者としたイランでの体制転覆は、グローバルな情報化社会の流れに乗って広く世界に報道され、イスラームの復活を強烈に認識させた。

1970年、ナーセルが心臓発作のため他界し、副大統領であったアンワル・サーダートが大統領に就任した。1973年の第四次中東戦争では、イスラエルに対して先制攻撃を行い、イスラエル占領下にあったシナイ半島に上陸するなど、イスラエルに大打撃を与えた。また、この戦争でアラブ産油国が石油戦略を発動し、反アラブ諸国への石油輸出を制限した。このため、日本を含む多くの国々で「オイルショック」（石油危機）と呼ばれる経済混乱が生じた[横田 2009:58]。

サーダートは、1977年にエルサレムを訪問し、イスラエル議会で和平を訴える演説を行った。これを機に、1978年、アメリカのカーター大統領の立ち会いのもと、イスラエルのベギン首相との首脳会談が行われ、キャンプ・デービッド合意が成立し、翌1979年にはエジプトとイスラエル間で平和条約が締結された。この合意により、サーダートはノーベル平和賞を受賞するなど、西側諸国からは高い評価を得たが、アラブ諸国は反発し、多くの国がエジプトとの断交や経済制裁に踏み切った。エジプトはアラブ連盟からも除名され、連盟の本部はカイロからチュニジアの首都、チュニスへ移された[山口 2006:333-332]。

サーダートは、政治・経済の自由化を推進し、ナーセルの社会主義路線を大幅に転

換した。政治では、複数政党制の復活を含む自由化が進められた。経済では、外貨導入を基本とする「門戸開放政策」(インフィターハ)による自由化が進められた。これによって、アラブ資本などの投資を呼び込み、サービス部門を中心に活況をもたらす一方で、インフレの加速や所得格差の拡大などの問題を引き起こした。サーダートは、それまでの自由化政策を一転して、1981年にはムスリム同胞団や野党のメンバー、コプト教会の指導者など批判勢力の大規模な摘発を行った。サーダートの強硬な政治姿勢は、国民の強い不満を招くこととなった。同年10月、第四次中東戦争の戦勝記念パレードを観覧中にサーダートはイスラーム原理主義過激派のジハード団⁽³⁾によって暗殺された。

サーダート暗殺後、副大統領であったホスニー・ムバーラクが大統領に就任し、現在に至るまで、独裁政権を維持している。ムバーラクはサーダートの政策を継承する一方で、アラブ諸国との関係改善を進め、1989年にはアラブ連盟への復帰を果たした。1991年から世界銀行・国際通貨基金(IMF)のもと実施した財政・金融の引き締め、価格統制の削減、為替自由化などを柱とする経済構造改革は、目覚ましい成果をあげた。この経済改革の成功により、1990年代には5~6パーセントの高い経済成長率を達成したが、石油輸出、スエズ運河通航収入、観光収入、海外出稼ぎ労働者の送金という外的環境の変動に脆弱な外貨収入源に依存する経済体質は変わらず、貿易収支も赤字が続いている。また、富の集中や貧困層の拡大といった経済改革の負の側面も顕在化してきており、若者の失業率も高い。

ムバーラクは、国民に痛みを強いる経済改革を推進するために、1981年のサーダート暗殺事件からずっと継続している非常事態令を用いて、反対派の声を封じ込めている。そのため、政治の自由化は進展していない。また、1990年代以降、イスラーム原理主義組織過激派の活動が激化したことも、ムバーラクが政治の自由化に慎重な姿勢をとるようになった要因である。しかし、ムバーラクが原理主義勢力に対する取り締まりを強化したことで、1993年末には、首都カイロで原理主義勢力の活動が下火になった。しかし1997年にはエジプト南部のルクソールにある観光地、ハトシェプスト女王葬祭殿にてテロ事件が発生し、多数の外国人観光客が犠牲となった。

(2) 女性の服装の変遷

エジプトにおいては、伝統的に女性は身体のほとんどを隠す衣服を着用していた。

しかしその装いには様々なスタイルのものがあり、時代・地域・階層などによって隠す身体の部位や隠し方には相違が見られる。1820 年から 30 年代の女性の装いに関する資料が残っているが、それによると、都市の上流・中流階層の女性は、掌も含め目とその周辺以外の肌を露出しない服装であるのに対して、下流階層の女性の方が顔を覆うヴェールの丈が短く、服装もラフで肌も一部見えている。ここから、着用の仕方は階層によって異なることが推測できる [大塚 2004b:160-161]。下の左の図は上流・中流階層の女性の外出姿であり、右の図は下流階層の女性の外出姿である。

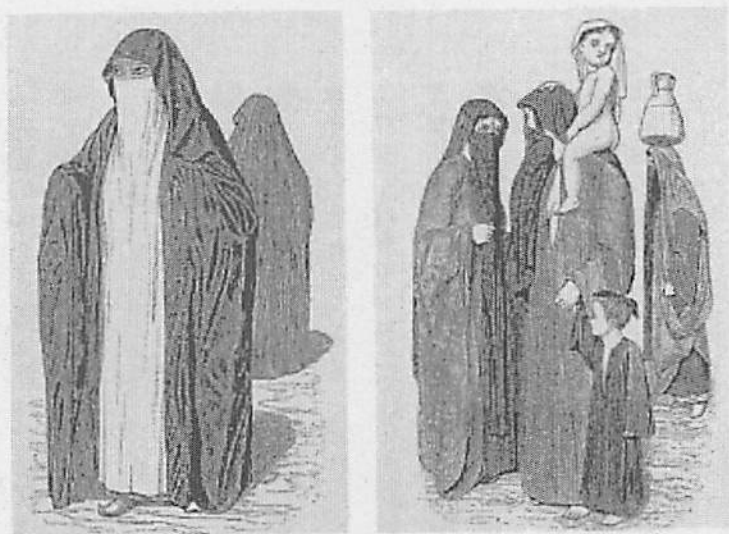


図1 19世紀前半のヴェール姿

([大塚 1999:454]より引用)

その装いに変化が表れたのは、1920 年代初頭である。この頃から、ヴェールを着用せず外出する女性が現れたのである。大塚は、その現象を「脱ヴェール化」と呼ぶ[大塚 1999:452-453]。脱ヴェール化を意識的に推進したのは、上流・中流階級出身者からなるフェミニストたちであった。1923 年、ローマで開催された国際女性参政権同盟会議にエジプト代表として参加したフダー・シャアラウィーとサイザ・ナバラウィーが、カイロ駅にてヴェールを脱いだという出来事があった。その際、2 人を迎えに来ていた仲間の何人かの女性たちも、彼女たちにならってヴェールを脱ぎ始めた。その後、一部で抵抗はあったが、脱ヴェール化が進み、1930 年代後半には、都市部では顔を覆うヴェールをつけずに外出することが普通になった。アズハル学院のウラマーも、外出時のヴェール着用を要求しないというファトワー（法学的裁定）を出した。

そして次第に、顔だけでなく頭髪も覆わなくなり、1960年代には、当時世界的に流行していたミニスカートを履く女性も登場するようになった [大塚 2000:120, 2004b:161-162]。ただし、これらのファッションは、都市の中級階層以上の現象であった。都市に住む下流階級や農村地域では、女性はガラベヤを身に着け、外出時には黒の上着とショールを身につけていた[大塚 2000:273]。ガラベヤとは、エジプトの伝統的な服で、ワンピースのような形をしている。普通長袖で、裾は足首のあたりまでの長さである。

下の写真は、1960年代にカイロ大学の卒業式で撮影された写真である。ミニスカートを着用している女性がいるのがわかる。また、誰もヒジャーブを着用していない。



図2 1960年代のカイロ大学卒業式における女性の服装
(サイイド・アシュマーウィー教授提供)

このような潮流に変化が生じたのは、第四次中東戦争の終わった1973年以降のことである。都市に暮らす高学歴の若い女性の中に、顔と頭部を覆うヴェールの着用と共に、身体の線が露出しないゆったりした長袖・マキシ丈のワンピースが流行するようになった。これを大塚は「再ヴェール化」と呼んだ [大塚 1999:455]。1970年代後半には、比較的高学歴の女性の間で、例えば大学のキャンパスを中心に再ヴェール化現象が起こった。それに対し1980年代後半には、カイロに住む中流もしくは下層中流階層出身の有職女性たちにも再ヴェール化の波が広まった。

1990年頃から、スカーフなどで髪の毛を隠してはいるが、多少派手な色調やデザイ

ンの服を着用している女性たちが目立つようになってきた。彼女らは、頭髪を覆っているとはいえ、身体のラインが目立つタイトな服を着て化粧もしている。従って、それはファッションでありイスラーム的な服装とはいえない、という批判がムスリム男性からも出ている。しかし、それでも再ヴェール化は、純粹に世俗的な流行現象ではなく、イスラーム復興現象の一部であると考えることができる。もし完全にファッションとするなら、なぜ隠す方向に向かっているのかが説明できないからである。確かに流行という側面があるにせよ、身体、髪、顔、手などを隠そうとするこの服装は、多くのエジプト人にイスラーム的な服装と解釈され、当事者たちもそう考えている [大塚 2004b:170] 。



図3 長袖・マキシ丈のワンピースを着た女性

([大塚 2004:169]より引用)



図4 カラフルな色調の洋服を着用する女性

(2009年6月 カイロにて筆者撮影)

筆者がエジプト滞在中に目にしたムスリマの装いについて述べておこう。大学内では、ヒジャーブを着用していないムスリマもたまに見かけたが、多くの学生は洋服に髪のみを覆うヒジャーブを着用していた。地下鉄の中ではニカーブとゆったりしたワンピースを着用し、手袋をして目以外を完全に隠す服装をしている女性も見た。若い女性のヒジャーブの巻き方は多様である。スタンダードな巻き方は、スカーフで首から髪を覆いマチ針で止める巻き方である。他には、2枚のスカーフを重ねて巻き、着ている服の色とコーディネートしたり、巻き方を工夫して個性を出したりしている様子が見られた。大学のエジプト人の友人に聞いた話では、巻き方にも流行があるようである。以下の写真では、2種類の巻き方が見られる。右の女性の巻き方がスタンダ

ードなもので、左の女性の巻き方は近年若い女性に人気のある新しい巻き方である。こちらの巻き方は、髪を覆うことはできるが首は見えるため、スタンダードな巻き方よりも肌の露出が多い。また、この写真は筆者の知人の婚約披露宴にて撮影したものであり、彼女らが普段着用しているスカーフよりやや派手な色調、デザインであることを付け足しておく。



図5 ヒジャーブの巻き方の例
(2009年5月 カイロにて筆者撮影)

服装に関して、トップスは、まず体にフィットする長袖を着て、その上にティーシャツなどの半袖の服を重ねて着ている女性や、ブラウスを着ている女性が多かった。ボトムスに関しては、ほとんどのムスリマは足を隠しており、タイトなジーンズや、かかとまで長さがあるスカートが主流であった。足が露出する丈の短いスカートズボンを着用している人はほぼ見かけなかった(図4を参照)。

(3)現在のエジプト都市部の様子

カイロ市内は、現在地下鉄が2路線とバスの路線が無数にあり、移動には困らない。カイロ近郊には人口が密集しており、どこへ行っても大勢の人を見かける。またカイロ中心部は建物が密集しており、会社のオフィスも多い。そのせいか、いかにもビジネスマン・ビジネスウーマンといったスーツや洋服を着ている人を多く見かける。しかしそれはカイロの中心部だけで、少し離れると地元民の雰囲気漂う住宅地もある。狭い道の両側に住宅がひしめきあっており、伝統的なガラベヤを着た人々が路上で会話をしながらゆったりと過ごしている。このような地区では外国人はほとんど見か

けない。それに対し、カイロ中心部は多くの外国人観光客が訪れる。そのため、外資系の高級ホテルから安宿まで、様々なタイプの宿泊施設がある。

町を歩いているとモスクをよく見かける。モスクは、その建物全体がモスクになっているものと、マンションやアパートの1階、もしくは地下1階部分の部屋をモスクとして使用しているもの（ザウヤ）が存在する⁽⁴⁾。ザウヤを含む多数のモスクからはアザーンが鳴り響き、毎日5回の礼拝の時間を告げる。アザーンに関し、昔はモスクに併設されている尖塔（ミナレット）から肉声で呼びかけていたようだが、現在はマイクとスピーカーを使って、大音量で流している。礼拝の時間には、モスクに人が集まり、集団で礼拝を行っている。また、大学やショッピングモールにも礼拝を行うための部屋があり、礼拝時間が近くなると大勢のムスリムがその部屋に入っていくのをよく見かけた。大きな地下鉄の駅には、礼拝用のスペースとしてじゅうたんが敷いてある場所があり、そこでも礼拝ができる。ムスリムはそれぞれ、大人1人がひざまずくのちょうどよい大きさの礼拝用のじゅうたんを持っていることが多い。家やモスク以外の場所で礼拝を行うときは、このじゅうたんを敷いて行う。イスラームの祝日である金曜日の昼の礼拝は集団礼拝をするのがよいとされている。金曜礼拝では、普段より多くの人と同じ時間に集まるので、モスクの外の道路にまでじゅうたんを広げている。マイクとスピーカーを使って指導者（イマーム）が説法を行った後、全員で礼拝を行っている。また、額にあざのようなものができている男性をたまに見かけることがあるが、これはお祈りダコと呼ばれている。日々の礼拝で額を地面に擦り付けることでダコができるため、敬虔なムスリムの象徴として捉えられている。

また、定められた時期になると断食や巡礼も行っている。断食月の昼間は人前で食事をするのがはばかれるため、ムスリムでないといえども断食の影響を受ける。ムスリムが経営する店舗のほとんどは昼間は閉店するのに対し、外資系のファストフード店は普段通り営業している。また巡礼月に筆者はカイロ国際空港を訪れたが、マッカへ巡礼に行くと思しき複数の男性が、巡礼用の白い布をまとい、家族に見送られている様子を目にした。また、筆者の友人のエジプト人ムスリムの男性は、巡礼月以外にマッカへ参詣する小巡礼（ウムラ）を行ったと述べていた。カイロ市内には、巡礼の旅の手配をするという旅行会社のポスターが貼ってあった。彼らがサウディアラビアで巡礼を行っている頃、国内では、「犠牲祭（イード・アルアドハー）」が行われている。この祭典は、朝早くに集団礼拝を行い、羊や牛などを屠る行事である。筆者も

エジプト滞在中、夜明け前から大きなモスクに行って集団礼拝の様子を見てきた。この日はモスクの前の広場のみならず、道路まで礼拝を行う人であふれており、人々が一斉に礼拝を始めると、荘厳な雰囲気漂う。その後、自宅の庭や肉屋の軒先では羊や牛が屠られ、神へ捧げられる。その肉は、家族で食べるほか、親戚や貧しい人々に分ける。また、犠牲となった動物の血は魔除け・厄除けの効果があるとされ、家のドアや門、自動車にその血を用いて手形が多数付けられる。エジプト人の友人は、「犠牲祭で血の手形をつけたおかげで調子の悪かった自動車が直った」と述べており、厄除けの効果を信じていると述べていた。

イスラームでは飲酒は禁じられているが、カイロ市内の主に外国人が多く住んでいる地域には酒屋があり、国営の酒造会社によって製造されたエジプト産のビールやワインなどの酒類を購入することができる。購入した酒を入れるビニール袋は黒色で、中身が見えないように配慮されている。また、外国人観光客が宿泊する中級以上のホテルでも酒類が提供される。ムスリムにとっては好ましくないとされるタバコも、スーパーマーケットや露店など、様々な場所で買うことができる。飲酒している人や酒類を購入している人はあまり見かけないが、タバコを吸っている人はしばしば見かけることから、一般的に、飲酒よりタバコの方が許容されているという印象を受ける。

カイロ中心部には、外資系のファストフード店や西洋風の内装のカフェがあり、人気を博している。外資系の飲食店とはいえ、これらのファストフード店では豚肉を含むメニューはない。豚肉に関して、生の豚肉や豚肉から作られるハムを購入できる店は、外国人が多く住むカイロ市内の高級住宅街にある。

カイロ近郊には大型ショッピングモールや外資系の巨大スーパーマーケットがある。休日である金曜日や、その前日の木曜日の夜は買い物客で混雑している。これらの店は、スーパーマーケットを除き軒並み価格が高く設定されている。一方、カイロには伝統的なスタイルの屋外・屋内カフェや飲食店、屋台も多く、こちらは比較的低価格で飲食を楽しむことができる。伝統的なカフェにおいて人々は、画面の大きなテレビでサッカーを観戦して騒いでいたり、バックギャモンなどのゲームに興じたり、紅茶を飲みながら水タバコ（シーシャ）の煙をくゆらせていたり、思い思いに過ごしている。

女性の服装に関しては前項で述べたためここで繰り返すことはしないが、前項で触れなかったムスリム男性の服装に関して記しておく。女性同様、男性も露出の激しい

服装はしない。具体的には、トップスは袖が短くても半袖で、肩を露出することはない。ボトムスは長ズボンを着用し、足を露出することはない。特に年配の男性には、エジプトの伝統服、ガラペーヤを着用している人も多い。ただ、会社勤めをしている男性は背広やシャツなどの洋服を着ており、ガラペーヤで出社するという事はない。若者は、夏であれば半袖のティーシャツにジーンズなど、カジュアルな服装である。

以上のように、現代のエジプトにおいては、イスラームと人々の生活が深い関わりを持っていると感じる要素や、昔からの伝統が変化していると感じる要素が入り混じっている。例えば、基本的に服装はクルアーンの教えに従って肌の露出を抑えるものを着用しているムスリムが大多数である。さらに、礼拝や巡礼、それに関連する祭典も行われており、イスラームが人々の暮らしに浸透している。それに対し、体のラインがわかるタイトな服を着ているムスリマがいたり、ヒジャープの色や巻き方を工夫することでファッションの一部とみなすムスリマもいる。次節では、このような状況にあるエジプト都市部に住む人々の語りを基に、イスラームに対する認識と女性の装いに関して考察する。

2. イスラームに対する認識と女性の装い

(1) ヒジャープの着用

現代のエジプトにおける女性の装いに関して、エジプト都市部に住むムスリムにインタビューを行った。まずはヒジャープに関する意見をまとめる。ヒジャープとは、頭髮と首までを覆い、顔は覆わないヴェールのことを指す。

まず、カイロ市内にある国立アインシャムス大学日本語学科の学生のムスリマNは、ヒジャープを着用せず、服装も夏なら半そでにジーンズと、とてもカジュアルである。彼女は、自身がヒジャープを着用していない理由を次のように語る。

まだ自分は若いし、カジュアルなファッションを楽しみたいためヒジャープは着用しない。家族も、着用しなくていいという。将来結婚したら、着用するようになるかもしれない。ヒジャープを着用すると、服装もおばさんっぽい服に変わる。カジュアルな洋服にヒジャープを着用しても、それは本当の意味でのヒジャープとは言えない。中途半端なのは嫌だから、将来ヒジャープを着用するようになったら、服装も徐々にゆったりした服に変えていくつもりだ。

クルアーンには髪を隠すのが好ましいと書いてあるが、それは強制ではない。自分で着用したいと思うようになったらする。

ただ、多国籍企業や、社内に外国人がいる会社で働くなら、着用しない方がよいのではないかと。フランスやアメリカの人々と接する場合は特に。

彼女は、カジュアルな服装にヒジャーブを着用してもそれは真の意味でのヒジャーブとは言えないため、ヒジャーブを着用するなら衣服もイスラームの教えに沿ったものを着用したいと述べた。また、外国人、特にムスリムと確執のある国の人々と接するなら、ムスリマであることを強調するヒジャーブを着用しないほうがいいのか、という意見を述べていた。

旅行会社に勤め、現在カイロで一人暮らしをする R は、20 代後半のムスリマである。家族の住むアレキサンドリアから単身カイロに移ってきたのをきっかけに、ヒジャーブを着用するようになった。その理由について、R は次のように述べた。

エジプト人のほとんどは家族と一緒に住んでおり、一人暮らしをするのは稀。若い女性であればなおさら珍しい。私は、周りの人に、軽い女、だらしない女だという印象を与えないために、ヒジャーブを着用するようになった。私の家族は、私がヒジャーブを着用することを強制しない。むしろ、お父さんは「一度ヒジャーブを着用するともう外すことはできないが本当にいいのか」と聞いてくれた。私がヒジャーブを着用するようになった理由は、カイロで一人暮らしをするようになって、イスラームの教えをないがしろにするわけではないという表明のためと、家族を安心させるためである。

彼女は、カイロにおいて女性ひとりで生活することに対する決意の表れとして、ヒジャーブを着用するようになったと述べた。

日本のマスコミで通訳の仕事をする 30 歳のムスリマ Z は、ヒジャーブを着用していない。それに関して、彼女は次のように述べている。

肌や髪を覆って悪いことをする人より、洋服を着ていてもよい行いをしている人のほうがよい。「どんな服装をしているか」よりも「よい心を持っているかど

うか」の方が重要である。私は洋服を着てヒジャーブを着用していないが、ムスリムとしての心は常に持っている。

礼拝の時には肌を隠すことのできるゆったりとした服に着替え、ヒジャーブも着用する。そのため、職場にはお祈り用の服、スカーフ、じゅうたんが常に置いてある。

ヴェールやゆったりしたワンピースを着用していながらも、電車の中でスリを働いたりする「悪いムスリム」がいると彼女は述べており、それに比べて、服装は洋服でも「よきムスリム」としての心を持っているほうが望ましいというのが彼女の考えである。しかし、礼拝という極めて宗教的な行いをする時には、服装もイスラームの教えに沿ったものを着用するようだ。

ムスリマ S はカイロ近郊の大学に通う学生で、ヒジャーブを着用している。彼女には、なぜヒジャーブを着用しているのか尋ねてみた。しかし彼女からは、ヒジャーブを着用していることに対する明確な理由が得られなかった。彼女は、ヒジャーブを何となくしたいからしている、彼女の母親が着用しているので自分も同じように着用している、と述べた。ヒジャーブをしていないムスリマに関して彼女は、「クルアーンには肌を隠すことが好ましいと書いてあるが、ヒジャーブの着用は強制ではないため、彼女たちの好きなようにすればよい」と述べていた。

(2)ニカーブの着用

ニカーブとは、頭髮から顔まで、目以外のすべての部分を覆う黒いヴェールのことである。ニカーブ着用者は、ゆったりとした黒いワンピースを着て、手袋をはめて肌を可能な限り隠していることが多い。筆者がカイロに滞在している間、地下鉄の中でクルアーンを読んでいるムスリマをしばしば見かけたが、そのいずれもがニカーブを着用しているムスリマであった。従って筆者は、ニカーブを着用しているムスリマの方が、ヒジャーブを着用しているムスリマよりも信仰心が深いという印象を受けたが、実際はどうなのであろうか。

筆者の友人である国立アインシャムス大学大学院生のムスリマ O に、ニカーブを着用しているムスリマに対する意見を尋ねてみた。ちなみに彼女はヒジャーブを着用しており、ニカーブは着用していない。

ニカーブを着用しているムスリマは、そのほうが信仰心が深い、イスラームの教えにより忠実であると思っているのではないか。しかし、着用しているヴェールがニカーブであるかヒジャーブであるかの違いで信仰の深さを区別できるものではない。ムスリマの中にはニカーブではなくヒジャーブを着用しているが、クルアーンやハディース教室を開いている信仰心の篤い人もいる。

同じ内容について、大学生ムスリマNにも質問をした。

エジプトの一部の女性がニカーブを着用している理由は、預言者ムハンマドの妻や娘がニカーブを着用していたという言い伝えがあるからである。ムスリマはムハンマドの妻や娘を理想の女性としているため、それにならってニカーブを着用している。しかし、ニカーブはエジプト人の文化・習慣ではない。

彼女が「ニカーブはエジプト人の文化ではない」と述べたように、エジプトではニカーブは防犯上好ましくない、という意見がある。顔を見なければ、性別や、その人が指名手配犯かどうかなどわからないためである。近年カイロでは大型ショッピングモールが増えているが、それらの入り口にはセキュリティチェックがある。そこで店員は、ニカーブを着用する女性に対し顔を出すように求めるが、女性たちからすれば素顔を出すことはできない、という摩擦が起こっている。

また、カイロ市内の3校の国立大学では、構内に入る時と試験を受ける時はニカーブを着用することが禁止になった。ショッピングモールの例と同様、構内に入る時のセキュリティチェックにおいてニカーブを着用しては本人確認がしづらいこと、また試験の際にニカーブの下にカンニング用機材を隠していてもわからない、という理由のためである。大学の女子寮にニカーブを着用した男性が侵入した事件の発生も、この決まりの成立を後押しすることとなった。当然、ニカーブ着用ムスリマから批判が出た。ニカーブを着用するのは個人の自由であり、彼女らがニカーブを着用する権利が認められるべきだと主張している。それに対し大学側は、ニカーブの着用を禁止するのは大学構内に入る時と試験の時のみで、それ以外の時は自由にしていいと述べている。

また、アズハル⁽⁵⁾大学のムフティー（イスラーム法官）も、「ニカーブは義務ではない」というファトワー（イスラーム法学の勸告）を発した[大塚 1999:455]。エジプト政府もニカーブは単なる風習、伝統に過ぎないという声明を発している。

(3)洋服からイスラーム服へ

1970年代から起こった再ヴェール化はムスリマがヒジャーブを再び着用するようになった現象を指すが、それに伴って服装も肌の露出を抑えるような服に変わった。再ヴェール化が起こった理由に関して、ムスリマ Z は、「昔は人々のマナーが良かったので、洋服を着ていてもイスラーム服を着ていてもよかった。しかし今はそうではないから、教えを広めることで風紀が乱れないようにしている」と述べていた。

カイロ大学教授で社会学・民俗学を専攻するサイイド・アシュマーウィーは、1970年以降、エジプト都市部に住むムスリマがイスラーム服に回帰した理由を以下ように述べる。

女性のイスラーム服への回帰には、国外からの影響と国内からの影響がある。まず、国外からの影響は、サウディアラビアの文化の影響である。1970年からのサーダート政権時代、経済の自由化と外資導入の結果、エジプト社会に急速に貧富の差が広がった。そこで、多くのエジプト人が湾岸の産油国に出稼ぎに行った。その中でもサウディアラビアに渡航した人数が特に多かった。サウディアラビアから帰国した出稼ぎ労働者とその家族が、イスラームの教えに厳格なサウディアラビアの文化をエジプトに持ち帰ってきたことで、イスラーム服が再び広まった。

次に国内の影響は、イスラーム原理主義組織過激派、ジハード団やタクフィール・ワルヒジュラ団⁽⁶⁾がムスリマに対し、肌を露出してはいけない、と通達したことである。

彼は、洋服からイスラーム服へ回帰した要因は、サウディアラビアの影響と、国内のイスラーム原理主義組織の影響の2つが挙げられると述べた。

さらに、大塚によると、イスラーム服への回帰には、女性の社会進出という要素も絡んでくるという[大塚 2000:122]。

女性の社会進出についてアシュマーウィーは、「現在は、働く女性が増えているが、

その大半は経済的事情により（貧しさのため）仕事をしている。欧米などとは異なり、自己実現のために働いている人はとても少ない」と述べる。しかしそれに対し、筆者の留学していたアインシャムス大学の友人たちは、卒業後に就きたい職業について語っており、仕事を自己実現の手段として捉えているようであった。ここに女性が働くことに対する意見の相違が見られる。大塚は、エジプト上流階級のムスリマで、高等教育を受けた者は自己実現の手段として仕事をするが、下層中流階級のムスリマはできることなら仕事はせず、家庭の仕事に専念したいという思いが強いと述べる[大塚 2000:122]。下層中流階層出身の有職女性たちは、家族の中では、高等教育を受けられるようになった最初の世代であり、卒業後職を得る機会があった。しかし同時に、彼女らは「女性は家の中にいるべき」という伝統的な価値観を共有している。そのため、家庭内でよき娘、そして結婚後はよき妻・母となって家事と育児に専念すべきという考えを持っているが、収入が必要なため家の外で働かなければならないというジレンマを抱えている。この葛藤を克服する手段として、ヴェールやゆったりしたワンピースなどのイスラーム服がある。それを着用することで、経済的事情から働いているが、それでも自分はイスラームの価値観に従っている、と主張しているのである[大塚 2000:122-123]。

片倉は、再ヴェール化によって女性の社会進出が促進されるという面もあると述べる[片倉 1991:94]。ヴェールは、イスラームの後進性の象徴であるかのように非難されることがある。確かに、古いしきたりの中で抑圧され、苦しんでいる女性たちが全くいないわけではない。しかし、ヴェールの着用が良い効果をもたらしている点にも目を向けるべきであると片倉は主張する。近年多くの女性が再びヴェールを着用するようになった。それは、イスラーム圏では「男の世界」と「女の世界」を分けることが原則となっているが、ヴェールを着用している女性であれば、男ばかりのところへ入り込んでもいいとされるからである、と述べる[片倉 1991:94-95]。

大学院生ムスリマOは、女性の社会進出に関し、イスラームの教えを守る職業なら働いてもよいと筆者に語っていた。同様のことは大学講師S（男性）も述べていた。例えば、教師や医師ならよいが、演技で自分の夫以外の男性とキスをする可能性のある女優や、肌の露出が激しい衣装を着るベリーダンサーなどの職業は好ましくないという意見であった。また、女性の役割は子供を産んで育てることであり、この役割を果たせる限りにおいて働いてもよいとも述べていた。ムスリマOは、子育てと仕事が

両立できないのであれば仕事をやめて家庭に入ると言っていた。ただこれは、イスラームの教えとして強制されているのではなく、彼女個人の考えであると述べていた。Oはアシュマーウィーと同様、最近は多くの女性が生活費の足しにするために仕事をしているとも述べていた。

また、カイロ大学学生のムスリム（男性）Mは女性の仕事について以下のように述べた。

イスラームの教えは、女性が教育を受けることや仕事をすることを勧めている。しかし、従わなければならない条件がいくつかある。それは、夫婦間の問題が発生しない仕事、女性に適切な場所・適切な服装で働く、仕事と家庭のバランスをとるという条件である。

彼も、女性が教育を受ける権利や仕事をする権利は認められていると述べていた。また、女性は適切な服装で働くことや仕事と家庭の両立という条件も含まれていた。

3. 小括

ここまで、エジプトの近代史を概観した上で、現在のエジプト社会の様子、女性の装いの変化、ヒジャーブやニカーブの意味、社会進出とイスラーム服の関係について言及してきた。1920年代初頭、エジプトがイギリスの保護国支配から解放されたのと同じ頃に脱ヴェール化が進んだ。この動きは、都市部に住む上流・中流階層出身の女性のなかから芽生え、進展していったのが興味深い[大塚 2000:120]。というのは、労働の必要などから比較的ラフなスタイルで外出できた農村部や都市下層の女性たちと異なり、彼女たちこそハーレム制度⁽⁷⁾の最大の犠牲者であったからである。彼女たちの服装は次第にラフなものになっていき、髪を覆うヴェールを着用しなくなっただけでなく、洋服姿で四肢を露出するようになった。1960年代には、当時世界的に流行していたミニスカートを着用する女性も増えるなど、西洋を模倣したファッションも受け入れられていた。

このような潮流に変化が生じたのは、第四次中東戦争の終結した1973年以降のことである。この頃、ヴェール着用と共に身体の線が露出しない、ゆったりとした長袖・マキシ丈のワンピースが流行するという再ヴェール化が進んだ。1970年代後半には、

比較的高学歴の女性の中で、再ヴェール化が進み、続いて1980年代後半には、カイロに住む中流もしくは下層中流階層出身の有職女性たちにも再ヴェール化の波が広まった。再ヴェール化が起こった理由はいくつか考えられる。まずは、1970年からのサード政権の「門戸解放政策」による影響を受けてサウディアラビアをはじめとする湾岸諸国への出稼ぎに行ったエジプト人が帰国したことである。イスラームに厳格なサウディアラビアの文化をそのままエジプトにも持ち込み、それが広まったのである。また、1970年代はイスラーム原理主義者の政治活動が開始される時期でもあった。従って、再ヴェール化はイスラーム原理主義運動と結びつけて考えられることが多かった。確かに、1970年代から1980年代初めにかけて、イスラーム原理主義運動の賛同者がニカーブを身につけていた傾向は認められる。しかし、肌の露出を極力抑える服装をしていれば必ずしもそのような思想を持っていたというわけではない。ヒジャーブやニカーブの着用者でも、イスラーム原理主義者の武装闘争を批判するムスリマは多い。大塚は、彼女たちの多くは政治的イデオロギーの表現としてではなく、みずからの「敬虔なムスリマ」という個人的アイデンティティを主張し、周囲の人々にもそれを示すものとして、イスラーム服姿をしていると考えられると述べる[大塚1999:456]。

1990年代には、髪を隠してはいるが、多少派手な色調やデザインの服を着用している女性たちが目立つようになってきた。これは、学業や仕事などにより活動範囲が広くなり、会う人も多いため自分の外見に気を遣うようになった結果なのではないかと考えられる。また、ヒジャーブをせず、洋服を着用しているムスリマも見られる。彼女たちは、髪を覆わず半袖の洋服を着用していても、ムスリマとしての心を忘れていないわけではないと述べた。この意見から、ムスリマだからといって、必ずしも洋服に関する規定通り・文字通りの装いをするわけではないということがわかった。

第4章 結論

本稿では、現代のエジプト都市部におけるイスラームの世俗化とは何かを明らかにすることを目的に、イスラームという宗教、近代以降のエジプト社会の変遷史、女性の装いの変化とイスラームに関する認識について検討を行ってきた。

イスラームは、礼拝や巡礼といった宗教的行為のみならず、信徒の日常生活のあらゆる場面に関する規定をもつ宗教である。それゆえ、イスラームの世俗化と一言で言っても、国や地域によって異なる現象が見られる。本稿では、エジプト都市部におけるイスラームの「世俗化」とは何を意味するのか、女性の装いを通して考察した。ムスリマは、クルアーンの記述を根拠に、髪をヴェールで覆い肌の露出を極力抑える服装が望ましいとされ、実際に多くのイスラーム国家において女性はヴェールを着用している。現代のエジプト都市部においては、ヴェールを着用し、ゆったりした衣服を着ているムスリマ、ヴェールを着用してはいるが体のラインが強調されるタイトな服を着ているムスリマ、ヴェールを着用せず半袖の洋服を着ているムスリマなど、様々なタイプの装いをしている女性が見られる。また、男性の服装も長袖が好ましいとされているにも関わらず、エジプト都市部では半袖を着用している人がほとんどである。イスラームでは飲酒や喫煙は好ましくないとされているが、カイロでは酒類やタバコを誰でも購入できる状況にある。

現在のエジプト都市部においては、上に挙げた例のように、一見するとイスラームの教えに従っていないと思われるような現象が起こり、いわゆる世俗化が進んでいるように見える。しかしそれは単なる「脱宗教」という意味での世俗化とは異なる。エジプトにおける「世俗化」とは、人々のイスラームへの信仰心が弱まった状態ではなく、信仰は大事にしていながらも、服装や嗜好品などの信仰以外の面に関するイスラームの規定に対しては、自分の行いを自分の考えで選択することができるようになった状態である。女性の装いの変化でいえば、髪や肌を規定通り隠してはいなくても、彼女たちがイスラームの教えをないがしろにしているということではなく、それが彼女たちなりに考えたイスラームとの接し方である、ということである。ヴェールを着用するにしても着用しないにしても、その選択権が個人にあるというのが現在のエジプト都市部におけるイスラームの状況なのである。これまでも、女性は装いによって、

自らの生き方の意思表示を行ってきた。クルアーンやシャリーアによって示される服装の規定に完全に従うのではなく、女性は主体的に行動し、考えを示してきたのである。1920年代には女性の権利の拡大を求めるため、当時は抑圧の象徴であると考えられていたヴェールを脱ぎ捨てた。1970年代にはムスリムとしてのアイデンティティの表明として、再びヴェールを着用するようになった。より多様な生き方が選択できるようになった現在、女性の装いもそれぞれの生き方を反映し、多岐に渡るものとなっている。

イスラームの決まりに関して、社会が個人に対してどの程度の拘束力を持つかは、国や地域によって異なる。例えばサウディアラビアにおいては、ムスリムはイスラームの教義を厳格に守るべきとし、個人の行いに対して国家や社会からの監視や法律による強制がある。それに対しエジプトでは、それぞれのムスリムがどんな服装でどんな行いをするかということに関して、社会からの強制や圧力はほとんどないといえる。つまり、現代のエジプト社会においては、個人に対するイスラームの規制や拘束が緩くなった状態である。エジプト都市部においてみられるイスラームの「世俗化」とは、個人、言い換えれば世間一般の人々、という意味での「世俗」がそれぞれの行いを選択することができる状況であると考えられる。

このような、エジプトに特有のイスラームの「世俗化」を引き起こした理由として、イスラームの法体系であるシャリーアが不文法であり、現在の状況に即してクルアーンが解釈されるという性質をもっていることが挙げられる。聖典クルアーンが編纂されたのが650年頃であると言われており、その時代と現代とでは、イスラームが信仰されている社会の状況は当然のことながら全く異なる。何が正しく、何が間違っているかという価値判断は、その時代を生きる人間が、その社会に合うようにクルアーンの解釈をしているのである。従って、時代によってムスリムの行動に関して柔軟な解釈がなされた結果、表出する現象は多様であるけれども、それらはイスラームの規範を逸脱しているわけではない、という状況が生まれている。エジプト都市部における女性の装いの変化でいえば、半袖の洋服を着ていたり、ヴェールを着用していないからといって、必ずしも本人たちの信仰心が弱まったわけではないということになる。それは彼女たちなりに現代の状況に合わせてクルアーンの内容の解釈をして、それがイスラームの教えに適うと考えた上での行動であるということである。

小杉は、宗教が現代を生き延びるためには、いつの時代でもそうであるように、あ

る程度時代に対応する必要があると述べる[小杉 1994:296]。また、クルアーンの解釈に関しては以下のように述べている。

クルアーン解釈の多様性の中には、イスラームに特徴的な一つの原理が隠されている。それは、どのような理念・思想であれ、クルアーンの章句の解釈として正当な形で展開できなければ宗教的妥当性を持たない、ということである。逆に言えば、そうすることができれば、新しい考えも信徒の支持を受け、説得性を持つ[小杉 1994:298]。

つまり、クルアーンの解釈として妥当性を有する限りにおいて、ムスリムそれぞれの意思で行動できるのである。信徒それぞれの考えによって行動できる状態をイスラームの「世俗化」と述べたが、あくまでもクルアーンの章句の解釈として正当であると認められる場合に限る、という制約がある。クルアーンの教えからあまりにも逸脱し、解釈の妥当性が得られない場合は、それはもはやイスラームであるとは認められず、従ってそのような行いをする人は「ムスリムではない」状態となる。ムスリムにとってクルアーンは価値判断の基準を示す最も重要なものであり、ムスリムはクルアーンの範囲内での自由を有しているのである。

7 世紀に創始されたイスラームが現在では世界中の様々な地域に広まり、異なる言語・文化を持つ人々にも信仰されている。イスラームは日々の行いに関して細かい規定をもつ宗教である。しかし、柔軟にクルアーンの解釈を行うことができ、信徒の生活に合わせることもできる寛容性も持ち合わせている宗教だからこそ、変わりゆく世界の中で、今まで絶えることなく伝えられ、広まってきたのであろう。

現代のエジプトにおいて、エジプトならではのイスラームの「世俗化」が起こったように、人々とイスラームとの関係は、今後もそれを取り巻く環境に合わせて変化していくと予想される。イスラームがムスリムの心の拠り所であり、アイデンティティの源である以上、イスラームはその時その場所に生きる人々の状況に合わせて変化しながら、生き続けることであらう。

注

- (1)それまでの女性の権利が抑圧されているとし、女性の地位の向上を目指した運動。
エジプトにおいては 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて起こった。女性の法的・経済的地位の改善の要求が行われ、女子の中・高等教育や参政権の獲得などが進んだ。
- (2)スルターンとは皇帝レベルの政治的権力者のことである。スンナ派の場合、ハリーファとは「神の代理人」とも呼ばれ、ムハンマドから継承される信徒共同体の長である。スルターン・ハリーファ制は、イスラーム国家の最高権威者であるハリーファがスルターンという世俗権力の長を兼ねる制度である。
- (3)ハリーファ制復興を目指すイスラーム原理主義組織。起源は 1960 年代に生まれた秘密結社にある。ハリーファを長とするイスラーム国家を樹立するためには、阻害要因である為政者を排除することが必要であるとの思想から、1981 年にサーダート大統領を暗殺した。
- (4)私がインタビューをしたカイロ大教授のサイイド・アシュマーウィーによると、サーダートは大統領時代、未だ政権に残る左派ナーセル勢力に対抗させるため、宗教勢力を活用した。例えば、ムスリム同胞団の活動を容認するほかに、建物を建てる時にザウヤを併設すると税金が免除されるという政策を行った。そのため、ザウヤはサーダート時代に爆発的に増えたという。
- (5)1970 年にカイロに建設されたモスクから発展した、イスラーム世界を代表するイスラームの最高学府。モスク、ウラマー（イスラーム法学者）組織、大学、中学、高校、法学委員会、教導組織、出版局などを含む。イスラーム世界有数のウラマーを有するスンニ派教学の最高峰として、政治に対しても大きな発言力を保持している。
- (6)通称ムスリム集団。サイイド・クトゥブのジャーヒリーヤ論の影響を受けたアシュート大学の学生シュクリー・ムスタファーが獄中で創設、1971 年の釈放後、活動を開始した。エジプト社会全体をタクフィール（不信仰者宣言）し、社会からヒジュラ（聖遷・移住）して孤立した社会生活を送る。
- (7)家屋の中で女性と子供たちが日常生活を送る部分のことである。中東の都市と同様、エジプトでも、19 世紀から 20 世紀初頭、地域によっては現在に至るまで、上流・中流階層の間では、女性と男性とは分離されていた。女性は家庭内の私的に囲い込まれた室内で自分たちの人生を過ごしていた[大塚 2000:116]。

参考文献

赤堀雅幸

- 2003 「禁じられた食べ物」後藤明・山内昌之編『イスラームとは何か』pp.198-199、新書館。

藤原和彦

- 2001 『イスラム過激原理主義』中公新書。

Amin, G.

- 2000 *Whatever Happened to the Egyptians?* Cairo: The American University in Cairo Press.

井筒俊彦

- 1992 『井筒俊彦著作集 7 コーラン』中央公論社。

岩崎えり奈

- 2003 「ジェンダー」後藤明・山内昌之編『イスラームとは何か』pp.194-195、新書館。

粕谷元

- 2003 「世俗主義」後藤明・山内昌之編『イスラームとは何か』pp.142-143、新書館。

片倉もところ

- 1991 『イスラームの日常世界』岩波新書。

小杉泰

- 1994 『イスラームとは何か その宗教・社会・文化』講談社現代新書。

内藤正典

- 2007 「スカーフ論争とは何か」内藤正典・阪口正二郎編『神の法 vs. 人の法—スカーフ論争から見る西欧とイスラームの断層』pp.2-28、日本評論社。

中山紀子

- 2003 「結婚と離婚」後藤明・山内昌之編『イスラームとは何か』pp.190-191、新書館。

大曲祐子

- 2007 「ムスリムの国トルコのスカーフ問題 世俗主義とイスラーム主義の相克」
内藤正典・阪口正二郎編『神の法 vs. 人の法—スカーフ論争から見る西欧と
イスラームの断層』 pp.237-271、日本評論社。

大塚和夫

- 1999 『『近代化』のなかのイスラーム復興』 福井勝義、赤阪賢、大塚和夫編『世界
の歴史 24 アフリカの民族と社会』 pp.398-471、中央公論社。
2000 『近代・イスラームの人類学』 東京大学出版会。
2004a 「イスラーム世界と世俗化をめぐる一試論」 日本宗教学会編『宗教研究』
78(2):pp.401-426、日本宗教学会。
2004b 『イスラーム主義とは何か』 岩波新書。

阪口正二郎

- 2007 「スカーフ論争とは何か」 内藤正典・阪口正二郎編『神の法 vs. 人の法—スカーフ
論争からみる西欧とイスラームの断層』 pp.29-68、日本評論社。

桜井啓子

- 2003 「身だしなみ」 後藤明・山内昌之編『イスラームとは何か』 pp.200-201、新
書館。

四戸潤弥

- 2003 「禁酒」 後藤明・山内昌之編『イスラームとは何か』 pp.236-237、新書館。

塩尻和子

- 2005 「イスラーム」 棚次正和、山中弘編『宗教学入門』、pp.48-58、ミネルヴァ書
房。
2007 『イスラームを学ぼう 実りある宗教間対話のために』 秋山書店。

山岸智子

- 1998 「Q94 イスラーム世界の女性はヴェールをかぶらなくてはならないのです
か。」 山岸智子・飯塚正人編『イスラーム世界がよくわかる Q&A100』
pp.202-203、亜紀書房。

山口直彦

- 2006 『エジプト近現代史—ムハンマド・アリ朝成立から現在までの 200 年』 明石
書店。

山中弘

2005 「世俗化論」 棚次正和、山中弘編『宗教学入門』、pp.193-194、ミネルヴァ書房。

横田貴之

2009 『原理主義の潮流 ムスリム同胞団』山川出版社。

英文サマリー

“Secularization” of Islam in the urban area in Egypt — Consideration from the changes of women’s clothes and veils —

The purpose of this paper is to make clarifying statement about “secularization” of Islam in the urban area in Egypt. To consider the issue, this paper deals with Islam as religion, the modern history of Egypt, the changes of woman’s clothes and veils, and other things related to Islam or Egypt.

Islam has teachings about not only religious activity, but also every aspect of muslim’s daily life. Since Islam is deeply linked to each muslim’s daily life, the phenomena that represent secularization of Islam are different among each country or each region. This paper attempts to clarify what is “secularization” of Islam in modern Egypt by considering the changes of Egyptian women’s clothes and veils.

In the urban area in Egypt, there are some types of women’s clothes. Some women wear loose-fitting and long-sleeved clothes and wear scarves around their hairs. Some women wear scarves, but wear tight-fitting clothes. And some women wear short-sleeved clothes and don’t wear scarves. The reason which Egyptian women wear various kinds of clothes is that Sharia is unwritten law and it can be interpreted according to the situation. If the interpretation of some action is depending on the logic of al-Quran, it is accepted as right action.

Therefore, “secularization” of Islam in Egypt is that each muslim can decide what to do in the non-religious realms in their daily life such as clothes. Even if they look like acting contrary to rules, they don’t forget religious faith. For example, some Egyptian women don’t wear scarves around their hairs, but they don’t run counter to the rule. They only interpret al-Quran according to their condition.

At present, Islam is spread around the world. Therefore, many people from a variety of backgrounds profess Islam. Islam is the religion which can be interpreted flexibly. That is the reason that Islam has continued for a long time. As long as people require Islam, Islam will continue with some alterations like examples in modern Egypt.

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々に力添えをいただいた。ここで、感謝の意を表したい。

まず、担当教官の関根久雄教授の丁寧なご指導に対してお礼を申し上げたい。お忙しい中、筆者の草稿に関して細部までご指導いただき、何とか卒業論文を形にすることができた。また、普段のゼミの活動においても興味深いお話をお聞かせくださり、2年間の学びがとても充実したものとなった。

エジプトでの滞在期間中には、本当に多くの人に支えられた。特に、カイロ大学のサイイド・アシュマーウィー教授には、2010年のカイロ滞在中にじっくりとお話を聞かせていただいた。また、私が興味のある分野の新聞記事や写真を提供してくださったりと、とても親切にしていた。アシュマーウィー教授を紹介くださり、自身の授業の時間を削ってまで私の調査に協力してくださった、留学生の木村さんに感謝したい。ワサット党党首のアブー・アラー・マーディー氏にも、現代のエジプト政治に関して興味深いお話を伺った。筆者の力不足で、伺ったお話を本稿に盛り込めなかったのが心残りではあるが、現代のエジプト社会に関する理解が深まった。また私がエジプトでかけがえのない経験ができたのは、エジプトの大学の友人や、日本から共に留学した友人のおかげである。

2年間のゼミでの活動を通じて、関根ゼミのメンバーの様々な視点からの意見に触れることで、自分の視野が広がった。私の発表時にも、それぞれの経験に基づく助言をしてくれたり、私の調査の不十分なところを指摘してくれたことで、研究テーマに対する考えを深めることができた。卒業論文の執筆を始めてからは、ゼミのメンバーと互いに励ましあったことが大きな支えとなった。

何不自由なく5年間の大学生活を送ることができたのは、両親をはじめ家族のサポートのおかげである。エジプト留学を決めた時も、私の意思を尊重し賛成してくれた。エジプトに留学したことで、私が大学生活で経験しなかったことが達成できたし、人生経験としても非常に大きな糧となった。これまで私が挑戦してきたことをいつも後押ししてくれた両親に、感謝の意を述べる。